シンポジウム「身体・社会・感染症―哲学・倫理学・宗教研究はパンデミックをどう考えるか―」

コメント（吉水千鶴子）

このシンポジウムの趣旨に即し、３つの報告を振り返りながら、簡単にコメントを述べさせていただきます（原稿化に際して若干の補足を加えました）。

趣旨には次のようにあります。
パンデミックにともなって生じたさまざまな問題のうち、既存の哲学的枠組みで掬い取れるものを扱う、というやり方ではなく、哲学思想研究のやり方や枠組みじたいを変えていく必要もあるかもしれない。本シンポジウムを「パンデミック後の世界」の理念をともに構想する第一歩としたい。

「パンデミック後の世界」について、田中さんからは「この状況下で抹消されがちな差異を再構築し、新しいロゴスへ向かうこと」という考察をいただきました。林さんからは「パンデミック対策と生命倫理」という興味深い説きおこしから、これまでの議論と分析をお示しいただき、「倫理的枠組み」の実例と必要性を明示していただきました。青野さんからは、2009 年のインフルエンザ・パンデミックの時の教訓が今日何も生かされていないこと、次のパンデミックに備えて感染症に強い社会を作るにはどうしたらよいか、という議論をいただきました。

こうした議論を共有することはとても重要なことと思います。これからの哲学思想研究のやり方として、当然もはや蛸壺型ではいられない、共通の課題、共通の問題への取り組みを行っていかねばならないことは明らかです。今日このシンポジウムはその取り組みの一つであり、このような場は「対話」としての哲学の場です。研究者だけではなく広く社会の中で対話をしていく、こうしたアクチュアルな哲学が今後さらなる可能性をもつように思います。

そして趣旨にありました「哲学研究の枠組み」ですが、今世界が分かち合っている問題や痛みを乗り越えるために、より一層大きな枠組みでの思考や対話が求められるように思います。パンデミックに伴って起こった様々な問題についてグローバルな現代社会での新たな倫理的枠組みが必要だということ、これがこうした危機に当たるもっと重要なことの一つであろうと思います。林報告が挙げた個々の問題についての倫理的枠組みの具体例は、私たちが納得して自粛や活動制限を行うために欠かすことができないものです。私たちは感染防止か経済か、個人か公共か、といった二者択一的な問題を前に途方に暮れているとい

うのが実情です。また、青野さんのご指摘にありましたように、科学的見地と政治の方向性が一致しないことに戸惑っているわけです。リスクコミュニケーションのあり方も課題であるとみな認識しています。青野さんが感じておられる「国のリーダーがサイエンスも踏まえた上で国民に語りかけることが全くできていない」ことは、諸外国のリーダーと比べてもみな共感するのはないでしょうか。こうしたことを総合的に考えていく対話の場と枠組み作りが必要なのかもしれません。学術会議がそこに貢献できる可能性があるだろうと思います。

次に仏教学者として考えたこと、感じたことを述べさせていただきます。

人はいつどこで死に襲われるかわかりません。感染症に限らず、この 10 年間だけでも日本では地震、津波、洪水、火山の噴火などという自然災害に毎年のように襲われ、多くの命が失われてきました。今日ではさらにテロの恐怖などもあり、人々の不安は増大しています。ただ、このような状況は人間の歴史の中で常に繰り返されてきたもので、それこそ「諸行無常」と体感されてきたのです。いつだってそうなのだから、このパンデミックだけが特別ではありません。中世ヨーロッパでペストが流行ったときに人々が口にした「メメント・モリ」、すなわち「死を思え」ということを噛みしめるべきだという論調も多く聞かれます。経済学者も次のような言葉を新聞に寄せています。

「今日、死生観などということは誰もいわない。だが、私には、どこか、古人のあの、人間の死という必然への諦念（ていねん）を含んだ「無常感」がなつかしく感じられる。少なくとも、古人は、その前で人間が頭を垂れなければならない、人間を超えた何ものかに対する怖（おそ）れも畏（おそ）れももっていた。そこに死生観がでてきたのである。われわれも、こころのどこかに、多少は古人の死生観を受け継ぐ場所をもっておいてもよいのではなかろうか。」（佐伯啓思、2020 年 7 月 2 日、朝日新聞デジタル）

生物学者からも同様の声が聞かれます。

「ウイルスが伝えようとしていることはシンプルである。医療は結局、自ら助かる者を助けているということ、今は助かった者でもいつか必ず死ぬということ、それでもなお、我々がその多様性を種の内部に包摂する限りにおいて、誰かがその生を次世代に届けうるということである。」（福岡伸一、2020 年 6 月 17 日、朝日新聞デジタル）

仏教を研究するものとして、これらの言葉への共感はあります。「諸行無常」がリアリティであるということはその通りです。しかしながら、同時にどこかに違

和感を感じます。というのも、安全なところにいて思ういわゆる三人称の「メメント・モリ」と、当事者となって思う一人称あるいは二人称の「メメント・モリ」はまったく違うからです。「人はいつか必ず死ぬ」ということと「自分が死ぬ」あるいは「家族や愛する人が死ぬ」というのは別物です。仏教などの宗教が真に扱うのはこちらの領域であり、一般論ではありません。今はそこへ踏み込むことはできませんが、この問題については宗教研究が貢献できる可能性があるとも考えます。また、先ほど田中報告に引かれたブラジルのボルソナロ大統領の発言、”I'm sorry, some people will die, they will die, that's life,”は一般論としては誤りではありませんし、事実でしょう。しかし、田中さんが論じられたように、they とは誰かを考えれば、これは三人称です。（他人事のように）大統領が口にすべき言葉ではないように思います。為政者であるならば一人称、二人称の死が起こっていることへの配慮が求められるのではないでしょうか（they であることによって聞き手も第三者のこととして聞きます。もし you will die と言ったら、どうなるでしょうか？ここにはコミュニケーションに際しての言葉の選び方という問題も関わっているように思います）。

もう１点、このコロナウィルスのパンデミックで私たちが引っかかるのは、それがもたらす災厄が社会の不平等をあぶり出している点です。まさに田中さんが批判的にご指摘されたことです。ウィルスは世界中の人々に襲いかかったという点では平等で、誰しもが感染の危険に晒されています。でも、例えば先のボルソナロ大統領やアメリカのトランプ大統領が手厚い治療を受けて速やかに回復する一方、十分な医療を受けられずに死んでいく貧しい人々がおります。また、経済活動の停滞で失業さらには自殺に追い込まれる人々もいます。ウィルスによる災いは不平等に私たちを脅かし、結局弱い立場の人たちの生存を最も脅かしていることは明らかで、こうした差異を、田中報告が論じたように、メンテナンスを怠り忘却し、抹消していってはならないことがまさに今問われていると思います。

今は世界中で、国家や個人の誰もが損する側に回りたくないと思い、自分たちの安全を最優先し、自分たちだけは生き延びようとする姿勢を示しています。哲学者のマルクス・ガブリエル氏はアサヒ地球会議で次の発言をしています。この「自分だけが生き延びると言う考えを克服し、全員が他者のために何かを犠牲にして危機を乗り越えなければいけない」（朝日地球会議 2020、2020 年 11 月 5 日、朝日新聞デジタル）。では、そのような、すべての人類が受け入れることができ、そのためになら多少の犠牲を払ってでも行動しよう、と思えるような倫理が果たしてあるのでしょうか、それを共有することができるのでしょうか。人類共通の災厄に見舞われている今だからこそ、それを考えるチャンスなのかもしれません。

もちろん社会的に不平等な死については政治の責任が問われねばなりませんが、このようなことに対して私たち個人個人は様々な感情を起こし、不安から攻撃的になったり、感染者や医療従事者などを差別する言動を起こしたりします。これらを克服し、「いのち」の平等という問題についての倫理、不安や痛みをシェアするための倫理というものが改めて求められているようにも思うのです。